大喜多喜夫先生のお働きに感謝して

学長　村　田　　治

関西学院大学における教職課程の歴史は1924年の中等学校教員無試験検定資格の認可に始まりますが、この認可は英語科教員を対象とするものでした。本学の教員養成の原点といえる英語科教員の養成、その中心を今日まで担ってくださったのが、大喜多喜夫教授です。

大喜多教授は1975年３月に関西学院大学文学部文学科をご卒業後、同年４月に大阪府立羽曳野高等学校英語科教諭として着任され、同校在職中の1990年１月にテンプル大学教育学研究科英語教育学修士課程を修了、Master of Education の学位を取得されました。職歴としては羽曳野高等学校の後、大阪府立富田林高等学校英語科教諭、大阪府立科学教育センター（現在は大阪府教育センター）指導主事兼研究員を務められた後、1993年４月に本学教職課程室に専任講師として着任されました。

その後、1997年より教職課程室助教授（1999年より教職課程室は教職教育研究センターに改組）、2003年より本学大学院言語コミュニケーション文化研究科前期課程助教授を務められた後、2005年より本学教職教育研究センター教授、2007年より本学大学院言語コミュニケーション文化研究科博士課程前期課程教授、2008年には同研究科博士課程後期課程教授を務められ、現在に至ります。2009年度から2012年度は教職教育研究センター副長、2013年度から2016年度には教職教育研究センター長もお務めいただきました。本学へのご着任から今日までの27年間、教職課程室から教職教育研究センターへの改組をはじめとする本学教職課程の充実とともに、本学大学院言語コミュニケーション文化研究科における教育と研究の充実にも多大なご尽力を賜りました。

大喜多教授のお名前は英語教育学の領域で広く知られています。英語授業研究学会の副会長や理事に選ばれたご経歴もその証左でしょう。これまで多くの研究成果を挙げられており、単著としては『To Learn How to Teach English』（関西学院大学出版会、2015年）、『英語教員のための授業活動とその分析』（昭和堂、2004年）、『英語教員のための応用言語学』（昭和堂、2000年）を世に送り出されました。日本の学校教育における英語教育の全体像を体系的に示しながら、さまざまな授業と学びのあり方への示唆に富むものです。全国各地の英語教育に携わる先生たちに向けて、英語教育のあり方を共に考え、築き上げようと呼びかける研究成果の数々は、高等学校の英語教諭としてのご経験を礎に、長年多くの教員を養成されてきた大喜多教授ならではと思われます。なお本年３月には『英語イディオムの用法と由来』（関西学院大学出版会）も出版されます。先生のご研究の集大成であり、大きな期待を集めていると存じます。

大喜多教授のご研究の成果は文部科学省検定教科書の作成や現職教員への研修などでも披歴されていますが、やはり本学の教職課程で主にご担当いただいた「英語科教育法」の科目こそ、その実践の場でありました。「英語の関学」とよく言われます。本学での英語教育の充実、あるいは大学入学試験の特色を評したものですが、本学が輩出した英語教員の卓越性によって、この言葉が裏付けられ、今も語り継がれていることを忘れてはなりません。大喜多教授は長年この重責を一身に負っていらっしゃいました。しかし大喜多教授の授業は、英語教員を志す学生に対して、この重責をそのまま押し付けるものではありません。英語教員になりたい、しかし自分の英語力に自信のない学生は今も昔も多いでしょう。そうした学生にも大喜多教授は闊達なお人柄で、おおらかに接してくださいました。笑顔を絶やすことなく、ご研究の中心にあった「外国語／第二言語として英語を学ぶ（teaching English as a foreign/second language）」の重要性を学生に伝え続けることで、英語力に自信のなかった学生も英語教育への抵抗感を和らげ、英語教員としての力を伸ばしていきました。学校現場で活躍する多くの同窓教員が、大喜多教授の教えを心の支えに、教師としての研鑽に努めていると聞いています。

現在、関西学院大学はグローバル人材養成や高大接続改革などを牽引する大学として注目を集めております。新たな時代に向けた教員養成のために一層のお力添えをいただきたいこの時、ご退職を迎えるのは大変残念ではございます。「“Mastery for Service”を体現する世界市民の育成」という本学の教育の使命にご貢献いただきました大喜多喜夫先生に深く感謝申し上げます。